

# 子どもにみんなで遊ぶ楽しさを



関 恵 美 子

## 一、この子にとつ

てかけがえのない先生でありたい。

——四月十日

### 入園式の日

待ちに待った入園式。

何年、この仕事をしていても、やはり楽しく緊張するものである。どんな子どもがくるだろうという期待は、裏返せばどんな先生だろうと不安な思いでくることだろう。

いい子であつてくれますようにと思うならば、まず私がい

い先生になろう。

今年是一年生になったつもりで進もう。要領よく子どもをさばくことができるだけの経験をもっていることは、考えれば恐ろしいことだ。あの新卒のときのように、汗をかきかき子どもの中の一人という気持をもってやろう。

式の最中もよくしゃべり元気なこと。

思ったより赤ちゃんでもなく、お兄さんお姉さんでもない。頭の中で描いた子どもの姿とは違う。びっくりしたのは、一人で立つとうという意欲を溢れるばかりその全身で示していることだった。とにかく、すぐく生命力の溢れた感じ、さりげない中にも、ひとりひとりの自己主張がみえる。これだ、これこそ大事にしていこう。——

新しい受持の子どもを前にして私はいつもこの感慨を繰り返したものだ。そしてこの思いは、年を経た今も変わらないし、いや一層底深い思いになっていくのだ。

あふれる愛と行き届いた保護の中で安心して生活していた子どもが、はじめて人の世に、その人生を踏み出す大きな転機。自分を受け入れ、慈しんでくれる分身のような心通う味方の人たちから、はじめて他人に接するおとな子ども、それが教師であり、友だちであろう。それだけに人間が人間を本当に心の底から大事

に愛し、お互い信頼の上で手をたずさえようとする大きな人間愛に育ってくれるためのすばらしい感動にしたいのです。

だから教師として、ひとりひとりのこの子との出会いを大切にしたいと考えます。

特に幼児教育は魂を育てる教育だけに、この受持のひとりひとりの子どもに対する愛、出会いの不思議さ、子どもが教師を選ぶことができないだけに、あのたくさんの美しい瞳が「私のために、いい先生であって欲しい」という声なき訴えに、私は心をこめて、しっかり受け止め、子どもをりっぱな人間として尊敬し、その心の主張を一言でも疎かにしない心のはり、鋭敏な感覚をもつて答えていかねばならないと思うのです。

ときに「あの子は先生運が悪くてかわいそうです」ということを聞くと、耐えられない気持になることがある。

できれば、お母さんでなく子どもから「私はいいい先生に出会ったので本当に仕合わせだった」といわれたい。これは教師たるもの一番の願いであろう。

しかし子どもは、幼くても仕合わせで、満足なときは、その態度でちゃんと示してくれる。クラス全体に活気があつて、ひとりひとりの背骨がちゃんとしていて堂々とみえる。そしてどの顔も利口そうで小さなことにも心が集中し、反応する緊張感がみられ、それでいてとても平和な明るさがあるのだ。

きつと無言の喜びであろう。

先生運というものがあつたら、これは運命ではなくて教師の努力如何にあつて人の力でかえられるものなのだ。

すべからく、幼い子どものために、私たちの精いっぱい研修で、すばらしい先生運に満たしたいものだと思う。

この子にとって、かけがえのない人生にかけがえのない先生になろうとする命題は、私にとって大問題なのが、むしろ毎日の子どもとの取り組みの中で、教師がその子をより知ろう、より生かそうと戦い、傷つき苦しみながら、教師自らの自己改造がよりよき人間として、少しずつ高まる中でのみ解決されいくのではないかと思うのです。

## 二、今年の保育のねらいと構え

ひとりの子を大事にしようということは、その子の精いっぱいしたことに対して、みんなで受け止め考えていく足がかりにしようとする姿勢を教師ももつことから始まります。異質なもの、何か不十分なものに対して、一つの尺度に照して、よいとか、わるいとか、上手とか、下手とか批判したり決めてかかるのではなく、そこに何かの意味と価値をみつけよう、自分の考えを確かめようとする構えを育てることは、たとえ、自分の考えや表現がみんなと違っていても、それに自信をもって赤裸裸に出すことができる

雰囲気作りにもなっていくと思うのです。

こうした教師と子どもの織りなす集団が、伸び伸びと屈託なく、それでいて、いいものには、ピシッと反応する生きた集団、雰囲気こそ子どもを育てるのだと考えるのです。

そこで今年、次の研究主題をもつことにしました。

「ひとりひとりに自信と意欲を育てる保育」

## 主題設定の理由

●ひとりひとりの絶対の独自さと、たくましい生活意欲をめざして

私たちは夢中で遊ぶ子どものありのままの姿の中に、ひとりひとりのもつ独自さに驚かされ、教えられ、恐れを抱くことがある。この絶対の独自さこそ、ひとりひとりの未来を包蔵した可能性であり、私たちは、どれだけ真剣に、そして慎重に、このことを考えただろう。

このひとりひとりが驚くべき独自さをもっていることは、いいかえれば、保育は一人を育てることに始まり一人を育てることに終わるといふことだろう。子どもに対する本質的な尊敬の気持を根底にもって可能性を発見し、たくましく育てることに徹しなければならぬと考えます。

## ●昨年度の反省に立って得た課題

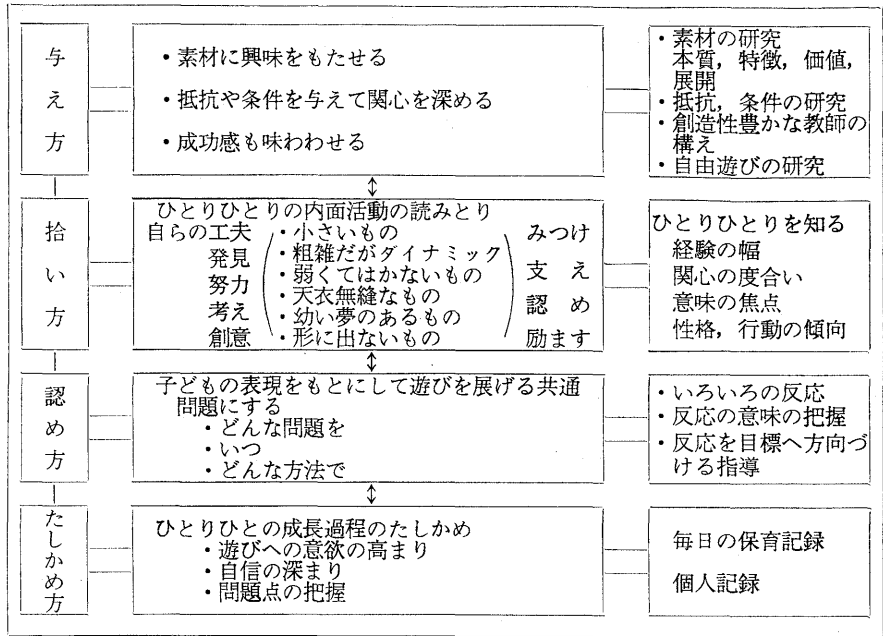
子どもが本当に子どもであり、しっかり自らをもたせるのに、本当に遊びを楽しんで没頭させたいと考えて、昨年は、「ひとりひとりが生きて働く保育はどうすればよいか」という主題で毎日の子どもの取り組みの中で探り続けました。そして得た課題は、1 子どもが問題意識をもって取り組みためにはきっかけをみついたり、条件や抵抗になるものを、うまく与えることの大事さ。2 子どもの個々の思いをたしかにつかむ大切さ。形に現われるものはもちろん、形に現われない内に流れるものをも、くみ取って本当にその子を知ることから、その子への適確な働きかけができ、このことを基礎におくべきだ。

3 自信を育てるには、仲間の支えや励ましが大きな役割をもつこと。

自分がみつけたこと、努力したこと、考えたことを仲間に認められ、励まされるとき、教師だけに支えられるより如何に大きな自信を得、また仲間をも励ますことか。こうして仲間とともに考える中に子どもは、人間としての望ましい態度や物の見方、考え方の幅が育つのではないか。

4 どんな質の反応も目標に近づく足場にしていくくふう。

子どものいろいろな反応の中で、ときには、むしろ教師の目標に遠く、相反した反応を取り上げることによって、みんなの子どもに問題が確認され、本物により早く近づくことを思う。問



題意識が漠然としている子どもも、こうした(→)反応が取り上げられることによって、より一層問題を意識づけられるのではないか。(上記表参照)

ここで私たちは、ひとりひとりが自分なりに考えよう、自分の力で努力しよう。創造しよう、抵抗も乗り越えようとする意欲を育てることの大切さを深く感じ、そして自分の考えや努力や創造力が仲間認められて得た自信が、また次への大きな意欲となつて育つことを思い、ひとりひとりに意欲と自信をしっかりと育ててだてを探り続け、可能性に満ちた幼児のひとりひとりに、たくましく物事を受け止め、乗り越えてゆく力と豊かな創造力を培いたいと思う。

三、一学期は子どもひとりひとりのあるがままの姿を適確に知ろう

・自然のふれ合いの中で  
不安と喜びに入り混った四月。みたところてんでばらばらで、まるで自分そのままのようですが、その実は、本当の自分を包み込んで生活している子がたくさんいます。

こうした子どもに、一日も早くその包みを開いてやるためには、ひとりひとりを自然の中へほうり出し、ぶつからせてみよう

と考えました。

当時、私たちは「太陽と水と砂と生きものの中で遊ばせよう」をモットーにして、春は晴天であればほとんど園庭で遊び過ごしました。太陽や水や砂は子ども心の扉を一枚ずつ開けてくれるように、小さな花や生きものは、ひとりひとりの心を和ませてくれるようにと願ったのでした。

入園式の翌日から各組とも園庭いっぱいくり出しました。池も満員、砂場もいっぱい、花壇も、金魚や亀のいるプールも、芝生も子どもであふれました。

池のまわりは、えびがにすくい活気を呈しています。

おや、年少児が網をもってがんばっています。年長児が「そこにいるよ」「あつ、こっちにきた」と教えています。

友だちの後から覗いているいくつもの真剣な眼、——誰かが、バシャンとはまりました。わあ！心配そうな皆の目が、やがて、着換えてきっぱりした姿を現わすと、なるほどと思ってくれたようです。

この頃の時期は、全く生きものに遊んでもらっているようなものでした。

時々、これでいいのかしら、と疑問や迷いを持ちましたが、子どもたちの生き生きとした朝の出足は、例年に見られないものでした。

私たちは、いろいろな角度から子どもに働きかける必要があります。いいかえれば、四五人おれば四五通りの角度（その子を生き生きと遊ばせる働きかけ）があるはずですから、ひとりひとりが大好きで、自分流に粘り強く遊べるということから、自然とふれ合う生活は多くのものを得ることができました。

#### ・子どもの心の自由を育てよう

この頃、子どもが家で「幼稚園は、ただ遊んでいたらいいから好きだ」といったのです。ほほえましくも考えさせられることばでした。

幼稚園は、本来楽しく遊ばせる場所であり、その遊びに子どもがすっぱりはまって没頭してこそ楽しいのではないでしょう。もし、かりに幼稚園の遊びを、させられるものと考え、思うとしたら大へんなことになります。

子どもが自分勝手に好きなことをしているんだ、というこの自由さから出発したいのです。子どもが、自らの行なおうとするときは、この心の自由さがあつてこそ、徹底的に取り組める粘り強さが生まれ、その中で、初めて物事の変化を発見したり、喜びをみつけることができ、遊びに対しても大きな意欲をもつことになります。

こうして夢中で遊ぶ状態の中から意外なその子を発見して、ひとりひとりの表と裏みたいな持ち味をみつけることがあります。

私たちは、子どもに赤裸裸に出させることを願ったのですから、そこに出てくるよきものを期待したり、そうでないものを否定するというやり方を、お互いに戒め合いました。赤裸裸の中に当然望ましいものと、好ましくない傾向もあるはずですから、その現実をこそ大事に肯定し、そこに視点をすえて、ひとりひとりの育ての出発点にしたいと思ったのです。

こうして、ひとりひとりが次第に一人としての個性を明確にしていく時、ひとりの子どもの重みに驚き、ひとりひとりの違いに大きな価値を知るようになって、私たちが、いのちを燃やして対決しなければ、とても育てられない可能性の無限さを感じるのです。また、子どもが赤裸裸に自分を出して、心に自由をもって生活を始めると不思議に素直になり、物の本質を受け止めてくれる姿勢になることを知りました。

それは、小さな動きをちゃんと見つけ感じられる柔軟な心になり、小さな事実も、自分の目で捉え、それを感じて全身で活動するということが次第にその子のようすまでちゃんとした姿にするのでしょうか。

それだけに、ひとりひとりのどんな見方でも、捉え方でも、それをバシッと受け止めて、整理し、意味づけ、認め、さらに問題として再び返してやる幅のある仕事をしなければ、到底意欲をもたせたり、自信に積み上げていくことにはならないと思うので

す。

次の実践記録は、私の幼稚園のあるクラスが、池のおたまじゃくし取りをきっかけにして、教師と子どもが小さな発見を大事にしつつ展開していった遊びの一部です。

#### 四、おたまじゃくしの遊び

二年長児  
混成組43名

##### 1、おたまじゃくしの池で

「おい！ この下にいる」

「シューッ!!」

「こっちから とつたらみつかる！」

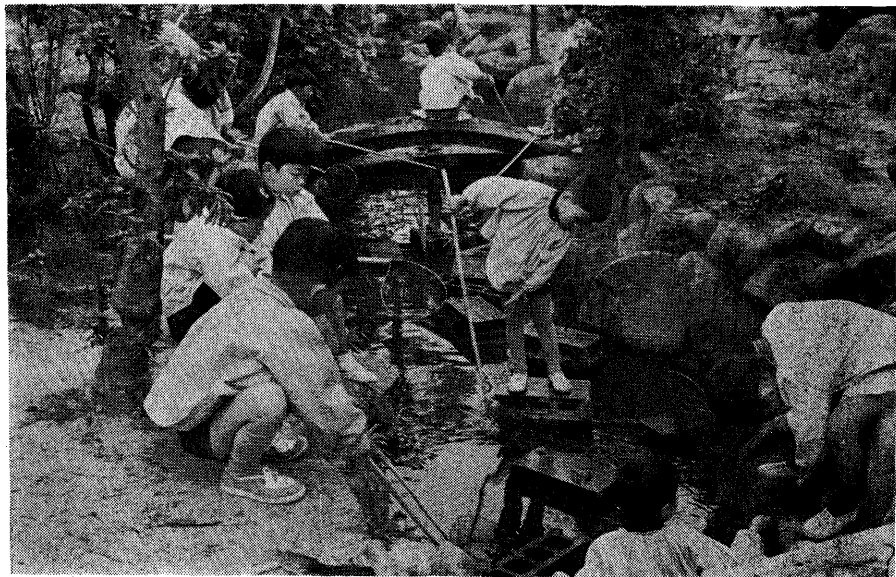
向こうから、向こうから……」

「I君！ うまくやりよ」

何といきいきと、おたまじゃくしに心をとめ、必死でくふうし、没頭しているのでしょう。中でも、日頃、集中力の弱いK君、無気力なIさんが、こんなに瞳を輝かせ、全身に意欲があふれています。

私はこの子が遊びによっては、こうも意欲的な瞬間をもつものかと驚きましたし、このエネルギーがきつと何かになるにちがいないと、明るい気持ちになりました。

きれいな水を入れ、よく見えるようにしつらえた水槽の中のおたまじゃくし、たらいの中の金魚、つかみやすい亀、動きのはでな



池でおたまじゃくしをとる

蛙など、子どもの目にも手にも容易に触れられるようにと用意したところで、遊ぶ子もいましたが、次第に自然の池のおたまじゃくしを見る子がふえ、池のおたまじゃくしを、とろうとする子も多くなりました。

そして、どうしてこうも真剣に追い続け、あきることなく挑み、より効果のあるとり方をと、くふうをこらすのでしょうか。何がこの子らの心をふるいたたせるのでしょうか。私は改めて、おたまじゃくしを見直すのでした。

「先生、おたまじゃくしは、つかめそうでなかなかつかめへん」という声もききます。たしかに、すぐとれそうでいて、安易にはとれないおたまじゃくし。子どもたちは、手を伸ばせば届きそうだという成功の見通しがありつつ、安易にはとれないぞという緊張感に支えられ、今度こそ！とやってみる——失敗する——またちがうくふうを加える——予想しなかった巧みな逃げ方——こうしておたまじゃくしとの対決の魅力が無限に続いているのです。そして、「とれた!!」という声が、ときにわき起こります。しかし三十分もかかって、まだ一匹もとっていない子もいます。

安易に成功し、認められ、そうよ、そうよと受け入れられることで自信をもち、やってみようという意欲をもつ場合もあります。が、今、この子らが、かくもいきいきと取り組んでいるのは、すばやく逃げる、体がすべる、というおたまじゃくしのこの抵抗、

細心の注意をしても失敗に終わるといふ緊張感が、原動力になっっているのではないだろうか。

## 2、おたまじゃくしの池をつくろう

苦勞してやっととったおたまじゃくしを、園庭で砂を集めて土手を作り、その中に水を入れて池におたまじゃくしを入れる遊びが何日か続きました。

もっと砂をたくさん運んで十分な高さの土手にしてから、水を入れるようにと話を話しても、子どもたちは、浅い池におたまじゃくしを入れるのでした。



わあ、土手がくずれた！  
おたまじゃくしの池づくり

おたまじゃくしは、大あばれする——さあ、これでは泳げないと子どもたちは大急ぎで水を運んでくる——低い細い土手がくずれる——大変、大変と砂を運ぶ——この繰り返しを、きゃっきゃつと楽しんでいきます。そして水もどんどんしみ込んでしまい、あわててまた水くみが繰り返されるのでした。

こうした一連の遊びを見ながら私は、こうしておかないと困るときがくるからとか、失敗しないために今こうしておくとかよい、ということは子どもには受けつけられないのだと。水が流れてしまふ、おたまじゃくしが泳げなくなるという危険を自分の力で、うまく切り抜けた成功感、ああここが問題だと自分でみつけ、こうしてみようああしてみよう、と対処する緊張感、これがこの生き生きとした遊びを支えているのだと感じたのです。

## 3、おたまじゃくしになって、遊ぼう

みんなが、おたまじゃくしになって、泳いでいます。変な音があるとすぐに池の底へ沈んでじっとします。

今日も庭の池で、いろいろの逃げ方をするおたまじゃくしを何とかつかもうとして、あれほどくふうしているのですから、もつといろいろの逃げ方をするものと予想していましたが、沈んでじっとすることばかりでした。

子どもはきつと如何にすばやくもぐり、じっと動かずにいることに関心をもっているのでしょう。そこでつかまりたくない思い



で、いかにすばやく音を聞きつけ、深い所へもぐってじっとしているかということに、ねらいをおきました。

楽しく泳いでいたり、ゆうゆうと石にもたれて休んでいても、ちょっと変な音がすると、すばやくもぐるところがとてもおもしろくなって、うまくなってきました。

次に、「底の方にじっとしているのは、あれはおたまじゃくしじゃないかしら」と、池の中へ入っておたまじゃくしを探し始めました。見つかったは大変と、机の下や、あちこちへかくれる子があり、みつからぬ場所へ大急ぎで逃げるのが始まりました。

しかし、ただ、むやみに動きまわって逃げようとする気持の弱い子はつかまってしまうました。そんな子を「さあ、ここがたらいよ」といって集めておきました。ほどなく「出たいなあ」という声がきこえましたが、この子らを安易に逃がしてやっては、何度つかまったのだからとか、もつとこうして逃げようという意識をはっきりもたせることには、ならないと考えました。

みんなは、つかまりそうになっても、あばれたり、すべって逃げたり石の下へうまくかくれたり、うまく逃げるおたまじゃくしということが次第にはっきりしてきました。

たらいの中のおたまじゃくしを見てMちゃんが、「早く蛙になってピョンと出たらいのいいに」といいました。そこで私は「ああそうだ、大変、大変、ふたをするのを忘れていた」といって、し

っかりと大きなふたをする身振りをしました。

たらいの中で蛙になろうと、ピョン、ピョンしていた子も、池で泳いでいる子も、さあ大変だというようすです。そこで私が「あのおたまじゃくしどうなったかしら、もう弱っているかも知れない」と近よると、「死んだ真似したらいい」と大急ぎで、ふたの開くの待っています。『じっと、しときよ!』と声援がかかります。

私は「おや、みんな弱っている。これは死んでいるらしい」とFちゃんを抱きあげました。じっと固くなっています。床におろすと、さっと泳いで帰っていきました。

「おや、生きていたのかな」というと席にたどりついたFちゃんの得意そうな笑顔。「これはどうかしら」と一人ずつ抱きあげ「よくしらべないと、まねかもわからない」といいますと、「笑わんとき!」「目つぶるとき! 口あいて!」と大変な声援です。こうしてK、O、S君が次々と生きてかえり大拍手を得ました。私は、調べ方をちょっときびしくしていきました。「どんなことあってもがんばりよ!」と励まされ一層だらんと抱かれるのです。そしてみんなうまく逃がれ、よかった、よかったと大喜びでした。私は「残念だった、今度はもつとよく調べよう」というと、一人の子が、「ぼくは絶対つかまらないぞ、モゴモゴの中へ入るもの」といいました。

#### 4 モゴモゴとおたまじゃくし

おたまじゃくしが、とりにくいのは、池の水が多いからだというS君のことばから、池の水のくみ出しが始まりました。熱心に皆が力を合わせたかいあって池はうんと浅くなりました。しかし池の水はすっかりにがり、おたまじゃくしの姿は見えません。モゴモゴのために姿を見失いました。

「水をゆらすな!!」

「そっとしておいたら見えてくる」

それは皆にも通じ、誰もが動くモゴモゴが次第に底に沈むのを見ました。少しずつ水が澄み、底の石も次第にはっきりしてきました。モゴモゴのこの動きは、子どもにも、私にも大へんな感動でした。

今まで、つかまるまいとあべれたり、深くもぐったり、石の下へ逃げたり必死にしていますが、それより、モゴモゴを使う方が、何より一番うまく逃がれることだということへみんなの子

どもが気づいてきました。

尻尾をふってモゴモゴを出そうとする子、あるいはモゴモゴになろうと、何人かが出てきました。それから、おたまじゃくしのどんなときに、モゴモゴは動いていくかというかわりあいを、遊んでいく中に、池の中で生活するおたまじゃくしの生きる知恵というものにまで、子どもは心に止めたようでした。

以上、おたまじゃくしの遊びの記録の一部ですが、これから絵で表現したり、みんなで思い思いのおたまじゃくしを作って壁面に大きな池を作って泳がせたりしました。

一学期の遊びは、教師としては綿密な計画をもっていて、それを先に出してまっでは子どもをお客さまにしています。

それより子どもの小さな興味とか発見を大事にひろげてやり、遊びの中で役立ててやることで、やろうとする意欲をもりたて本当に楽しい気持で遊ぶようになるのではないかと考えます。

(晋屋市立小椋幼稚園)

#### ■新刊

一九六七年版

# 保育学年報

日本保育学会における研究発表および総合的文献目録を収め、幼児文化財、保育関係団体、保育者養成機関、保行政、保育および保育学の動向など内容も豊富。

世界にも余り類例を見ないものである。保育関係者にとって、必要不可欠の文献である。

B5判256頁／定価2300円／日本保育学会編／フレーベル館発行

山下俊郎